

# 「第76回 二紀展」盛況の内に閉幕

## 南口清二新理事長に聞く、二紀会の現在地



南口清二新理事長＝10月25日撮影＝

国立新美術館で10月18日～30日、「第76回 二紀展」が開催され、連日、多くの鑑賞者や多様な関連イベントで賑わいを見せた。今回、26年もの長きにわたり理事長を務めた山本貞氏に代わって、5月26日付で新理事長に就任した南口清二氏に、二紀会の今、そしてこれからについて話を聞いた。

―長年務められた事務局 作品を持ち寄り語り合う長から理事長となり迎えた今展。その心境は。

何よりも様々なことを決裁することの責任の重さです。これはきついです。立場が変わると見える景色が全く違います。山本先生の大変さが少しは見えてきました。

今、美術団体が置かれている状況は確かに厳しいものがあります。事務局長と常務理事、年齢層の近い4人と、新しい若い理事たち、共に今まで頑張ってきた理事でしっかりと話し合うことを軸にした体制で進めます。

―今の二紀会を支える仲間たちへの想いは。

今回の二紀展の出品者数は1000名を超えています。この仲間たちが

品も大切にしたい展示を目指します。3年ぶりの懇親会には300名を超える仲間が集まり、皆握手を交わしていました。会いたくて仕方なかったのです。授賞式の挨拶で吉岡正人事務局長から「表彰状を授与するんじゃない、僕らからのラブレターとして受け取ってほしい」とありましたが、今がどんなに苦しいか分かるからこそその言葉です。

―変わったこと、変わるべきことも多い中、変わらず守り続けたいことは何でしょうか。はっきりにしています。「二紀会主張」です。・美術の価値を流派の新旧に置かず、皮相の類型化を排する。・具象・非具象を論じない。流行によって時代を誤ることを極力避ける。

―コロナ禍を経て、依然公募団体はさまざまな壁に直面しています。公募団体は日本独特の文化です。文化の裾野を大地のごとく広げています。文化的な生活という言葉の中身を大事にしたのです。多くの美術団体が現状の文化の在り方を語り合う場を作りたいものです。すべての関係者が何とか集まることが出来ればいいのですが。

―戦後すぐの時代に公募団体の在り方を言い切っています。みごなものです。この先人の思いこそ引き継ぐべきものです。私たちがこの精神を語り合い、生かす切ること。私たちの使命です。

―開幕後の感触や反響はいかがでしたか。展示を少し変更しました。どう見えるか、鑑賞者からの声を大切にしたい。絶えず考えてゆきたいです。大作と同時に小品作

「これからの美術」も大きな課題です。科学の進歩を否定するものではなく、まして世界の状況の大きな変動の中で創作

### 〈巡回情報〉

名古屋展	11月28日～12月3日 愛知県美術館
広島展	2024年2月6日～11日 広島県立美術館
京都展	2月20日～25日 京都市京セラ美術館